

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第3回



坂本真至

土木学会附属土木図書館

今回は、土木図書館の坂本真至さんです。膨大な本と資料に囲まれた文系目線から選ばれたのは、社会と思想への誘いとなる3冊です。

坂

本さんは2003年から土木図書館にお勤めで、現在も嘱託という形で図書館と学会の関連委員会

を支えていただいている。以前は建設コンサルタント社員として社内資料室の仕事等を担当し、学会の図書館委員会活動をきっかけとして、50歳の節目に土木図書館専任となる。司書の資格も持ちこたえて、学会所有の歴史的資料のデータベース化、検索システムを整えてこられた。その成果である創刊以来の土木学会誌や古い絵はがき等のデジタルアーカイブスは、社会に対する学

会の貴重な情報発信となっている。

さて、その坂本さんのご推薦の第一は、宮本武之輔に関するものである。当初高価な貴重本をご指定されたのだが、比較的手容易な新書の『技術官僚の政治参画』としていただいた。著者の大淀昇一は科学技術史を専門として、宮本武之輔に関する学位論文を著している。そこでは明治の技術官僚の仕事や社会的地位の分析のみならず、宮本という人物への興味があふれている。新書では文系に比して地位が低かった技術官僚が大正期から戦前にかけて、そのプレゼンスを高めていく過程を追う、土木技術者の政治への参画が同時に大政翼賛への流れや戦争につながったことも示される。こうした時代の流れのなかで技術者は何を考えていたのか。それを想像することは、現代の混乱した社会における土木技術者の立



SAKAMOTO Shinji

図書館司書。北海道職員、日本技術開発(株)情報システムセンター課長を経て、土木学会図書館・情報室長。現在は室付嘱託。

ち位置や展望に、何らかの示唆となるのではないか。

次の『逝きし世の面影』は、明治維新前後に日本を訪れた外国人の目に映った日本人の暮らしを綴った記録を淡々と紹介しながら、近代化の意味を問うものである。著者の渡辺京二は1930年生まれ思想家であり、日本のナショナリズムとは何かを考えるなかで、近代化以前の日本人像に着目する。当時外国人たちは、近代文明を持たない後進国に文明をもたらそうとやってきたのだが、当の日本人は実に幸せそうに生きている。封建制を解き、西

欧文明による近代化を進めることが本当に幸せなのか。そういった外国人エリートの中において疑念の念は、現代の私たちが、人間の幸せとは何かを

技術官僚の政治参画

—日本の科学技術行政の幕開き—

大淀 昇一：中公新書



逝きし世の面影

渡辺 京二：平凡社ライブラリー



アースダイバー

中沢 新一：講談社

